BROADCAST CREATORS ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No.98
2023.06.16
グランプリ
特集号

〒102-0094　千代田区紀尾井町１－１　千代田放送会館３階　Tel&fax:03-3221-0019　Mail:info@hosojin.jp
発行　一般社団法人・放送人の会　会長　今野　勉　編集　菅野高至、鈴木典之、逸見京子、田中典子、松尾羊一
事務局　深尾隆一　須斎恵美子

(敬称略)　青山浩平　吉岡弘行　芦崎秀樹　吉岡史幸　増井威司　冨山雄一　小池幸太郎　東野　真
持丸彰子　曺　琴袖　真野修一　今野　勉　小田玲奈　風間太樹　奥秋　聡

～巻頭言にかえて～

〝原点に還る〟

放送人の会 会長
今野 勉

この原稿を私は北海道の別宅で書いている。私は、四歳の時から就職で上京するまで、自宅は北海道だった。北海道は私の原点だ。

この四月に、私は八十七歳になったが、まだテレビディレクターの仕事をしていて、北海道で暮らすことは出来ていない。もうこの年になっては、北海道に移住するのは無理というものだ。だが、時折こうして北海道で過ごす日々を持っている。時折、わが人生の原点に還っている、ということになろうか。

私のもう一つの原点は「放送」だ。私が放送界に入ったのは、大学の就職担当事務員が、私の、新聞社への出願書類を出し忘れたことによる。まだ間に合ったのが民放への出願だった。結果、放送が私の原点となった。以来、六十余年、私はまだ放送界で働いている。どうやら新聞より放送の方が私には向いていたようだ。

北海道の別宅で、森と湖を眺めながら、私は呟いている。

〝人生なんて解らんもんだ〟

（二〇二三年六月九日）

放送人グランプリ2023（第22回）

◆グランプリ 大賞◆　NHK

ETV特集「ルポ 死亡退院 ～精神医療・闇の実態～」

◆グランプリ 優秀賞◆　中国放送

「生涯野球監督 迫田穆成（さこだよしあき）～終わりなき情熱」

◆グランプリ 優秀賞◆　NHK

ETV特集「久米島の戦争～なぜ住民は殺されたのか～」

◆グランプリ 特別功労賞◆

吉田拓郎

◆グランプリ 特別賞◆

「無理しない ケガしない 明日も仕事 ～新根室プロレス物語～」

制作チーム　プロデューサー 吉岡史幸　カメラマン 芦崎秀樹

◆グランプリ 特別賞◆　TBSテレビ

「報道特集」

＜第9回大山勝美賞＞

小田 玲奈　プロデューサー　日本テレビ

風間 大樹　ディレクター　AOI Pro.

放送人グランプリ２０２３　開催の経緯

放送人グランプリは本年23年度で22回目になりました。コロナの影響で、贈賞式と受賞パーティーがセットで開催されるのは4年ぶりになります。

（※この項目、敬称略）

今年度のグランプリ選考会議は、3月29日、会員の投票をもとに、剛堂会館会議室で、左記の贈賞委員の出席で行われました。

出席の委員は、小川和之、木原毅、菅野高至、深尾隆一、三原治、八木康夫、矢島良彰、山登義明、渡辺紘史（委員長）。

なお、選考会の前後に、アドバイザリー委員の河野尚行、鈴木典之、隈部紀生、林健嗣、村上雅通に意見を求め4月中旬、上記のように決定しました。

大山勝美賞選考会議は4月4日、招待委員の五十嵐文郎、当会会員の石橋冠、鈴木嘉一、鶴橋康夫、八木康夫（委員長）、若泉久朗、渡辺紘史の出席で行われ、4月中旬、上記のように決定しました。

☆　☆

第21回の贈賞式は、5月20日（土）午後3時より、千代田放送会館2Fで開催しました。

式の司会進行は、渡辺紘史贈賞委員長が務めました。

なお、本当の表彰状には句読点はありませんが、会報では読み易くするため、句読点を付加し、数字の表記等を変えています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

開会の辞

今野　勉　会長

受賞者の皆さん、わざわざお越しいただきありがとうございます。コロナ禍、どうなるかと思っていたのですが、無事、皆さんをお招きすることができました。

放送人グランプリは、放送番組の制作に携わっている者が、自分たちの仲間から一番いいと思う番組を作った人を選ぶというものです。放送人による放送人に対する賞ということです。

当然ながら、こういう賞は放送人グランプリしかありません。私たちは、どのようにしていい番組を作ったかということを批評家とは違った目で世間の皆様に知らしめる、という役割がこの賞にはあるんじゃないかと思ってきました。

今回、私たちが誇りに思うような番組、そしてその制作者たちを選ぶことができました。僕はぐうぜん受賞作品をすべて見ていました。

そんなに暇になったのかなとつくづく思ったのですが、僕もまだ現役で頑張っています。

今日は皆さん、おめでとうございました。宜しくお願いします。（拍手）

大山勝美賞　贈賞経過

八木康夫　大山勝美賞・審査委員長

大山勝美賞の八木です。審査委員は僕と鈴木嘉一さん、鶴橋康夫さん、石橋冠さん、五十嵐文郎さん、渡辺紘史さん、今年度から新しく若泉久朗（元NHK理事、KADOKAWA）さんが加わり、計7人で審査にあたりました。

最初に各委員から、プロデューサー1人、ディレクター1人の候補を持ちよって、ブレーンストーミングで数人に絞りまして、その中からお二人ともほぼ本命で、あまり議論することもなく、全会一致で決まりました。プロデューサーが小田玲奈さん、ディレクターが風間太樹さん。

一言、申し添えますと、この数年、プロデューサーの候補にあげられる方がほとんど女性なんですね。テレビドラマをご覧になっている方が、女性が多いので自然の成り行きだと思いますし、女性の活躍の場が広がっていてすごく良いことだなと思っています。

お二人、おめでとうございます。（拍手）

大山勝美賞　贈賞

会長より表彰状とトロフィー、盾、ささやかな賞金が贈られました。

小田　玲奈　氏

〈表彰状〉　貴方は情報番組やバラエティー番組を担当した後、不動産売買をとおして現代の家族の問題を浮き彫りにする異色のコメディー「家売るオンナ」を初プロデュースし、続編も作りました。同じく働く女性を主人公にした「地味にスゴイ！　校閲ガール・河野悦子」などでも徹底的な取材を欠かしません。

また「ブラッシュアップライフ」は、どこにでもいそうなヒロインが何度も人生をやり直すという奇抜な設定とリアルな会話で女性層の共感を呼び、新たな境地を開きました。

今後の更なる活躍を期待して、放送人グランプリ大山勝美賞を贈ります。

【祝辞・選奨理由】　八木　康夫氏（委員）

小田さん、おめでとうございます。僕は未だに現役のつもりでいるので、一プロデューサーとして感想を述べさせていただきます。

5年前ぐらい前までは、各クールごとに新番組の第1回だけは全部見ていました。プロデューサーの義務として見ていまして、そのうえで、続けて見るか見ないかを決めていました。

ところが5年前くらいから、クールごとに初回を全部見るのがしんどくなりまして、番宣等の情報で、おこがましいんですが、ある程度目星をつけて選んで見るようになりました。それで23年の1月クールでは、ご免なさい「ブラッシュアップライフ」は僕の視聴リストには入っていなかったんです。ラテ欄の紹介では、どういうドラマかイメージがわかなくてパスしてしまいました。

そしたら、私事で恐縮ですが、家内が見ていたんですね。なんで見ているのかを聞いたら、30代の娘から情報を受けて見ていたんです。その時はもう、第4回か5回目でして、第1回から見るためにhuluに加入しまして、見たら、これが面白いんですね。テレビというメディアは、作り手も世代交代するメディアだと思っているので、こういうドラマが出てきたら、僕はやっぱりそろそろ…かな、という感じを持ったんです。

この10年は新番組を見る度に、これだったら僕の作った方が面白いぞ！という気持ちでやってるんですけど、「ブラッシュアップライフ」を見て、この手のドラマは僕にはできないと思い、アイデアとキャスティングと芝居が素晴らしいドラマだと、一視聴者として大変楽しませて貰いました。

オリジナル連続ドラマだと、普通は3話から4話ぐらい持って入って、後は撮って出しみたいになっているんですが、それではできないだろうなと思うぐらいの緻密な構成で、エンタテインメントとして楽しいドラマだったと思います。

小田さんは「家売るオンナ」（16年度）の時に大山賞の候補としてお名前は出たんですが、大石静脚本ゆえに、もうちょっと活躍の様子を見たいと言うことで見送らせていただいたのですが、今回、すばらしい作品を世に出していただいて本当に嬉しいし、これからも、もっとご活躍なさるでしょう。まだまだ、お若いので面白いドラマを作っていただけることを楽しみにしています。期待しています。

おめでとうございます。（拍手）

【受賞者のことば】　小田　玲奈　氏

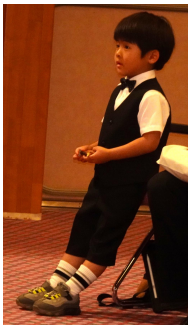
日本テレビの小田と申します。この度はすごい賞をいただいてしまい…ちょっと浮き足だった気持ちです。

「ブラッシュアップライフ」を面白かったと言っていただけるのはもちろん嬉しいことなんですが、今、懐かしい「家売るオンナ」や「地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子」の映像が流れたのを見て、この賞がこれまで積み重ねてきたものに対していただけているんだ

と実感し、感動しています。

今、自分は入社20年目になります。ドラマ志望で日テレに入ったにも関わらず、12年間、情報番組やバラエティー番組を担当しました。ただ、「有吉ゼミ」の「坂上忍、家を買う」（14年2月から放送）に関わっていたからこそ「家売るオンナ」は生まれたし、「地味にスゴイ！」は、まさに私がドラマ部に行きたいけど行けなくて、でも目の前の仕事を頑張った12年間は楽しかったという想いを、ファッション誌の編集部で働きたいのに校閲部で輝く主人公に重ねて作ったドラマです。こういう作品たちが、今回の受賞につながったことを思うと、自分の会社員人生は、遠回りしたようで、ひとつも無駄ではなかったんだなと思えました。

先程八木さんにおっしゃっていただいた「すごく緻密な計算の中で作られたお話」ですが、実は企画立案当初はこんな話になるとは思っておらず…、一話一話を面白くして、のちのち辻褄を合わせたらあんな結末になったという…お笑い芸人のバカリズムさんならではの作り方で出来たドラマです。こういうことに順応できたのも、これまで自分がバラエティー番組で培ったことが活かされていると思います。



今日は会場にチビ（息子）が来ています。彼が将来大きくなった時に面白いと言ってくれるドラマを作るということが今の私の原動力です。普段の私は本当にダメダメなママですが、こういう場で偉い人から賞を貰ったりしているのを見て、しばらくは威厳を保てるんじゃないかと思っております。

これからも面白いドラマを作り続けたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

風間　太樹（ひろき）氏

〈表彰状〉　貴方は２０２０年「チェリまほ」という略称で親しまれた「30歳まで童貞だと魔使いになれるらしい」をヒットさせ、映画版でも監督を務めました。

同じテレビ東京の深夜ドラマ枠では、翌年「うきわ―友達以上、不倫未満―」を演出、２０２２年には31歳の若さでフジテレビの「サイレント」のチーフ演出を担いました。ロケを主体にして、自然音や無音などにも気を配る繊細な演出手法は「倍速視聴」に走りがちな若い世代の心をとらえました。さらに社会現象を巻き起こした映画作りにも意欲を示しています。

今後の更なる活躍を期待して、放送人グランプリ大山勝美賞を贈ります。

【祝辞・選奨理由】　鈴木　嘉一氏（委員）

おめでとうございます。この大山勝美賞は今回、9回目なんですけれど、毎年、プロデューサーとディレクターから選ぶので、毎回2人で8回、合計で16人が受賞してきました。これまで一番若かったのは第2回受賞者の岡野真紀子プロデューサーで、年齢は30代半ばでした。当時はＷＯＷＯＷにいて、今はNetflixに移りました。今年受賞する風間さんは31歳で、一番若いんです。

それではなぜ、これまで若いディレクターが受賞の対象にならなかったのかを考えて見ると、今や30代前半ぐらいでは、プライムタイムの連ドラのチーフ演出をするのは、なかなかあり得ないんです。だいたい三番手あたりのポジションでしょう。昔だったら、芸術祭参加作品とか新鋭ドラマシリーズとかがあって、やりたい企画を作る機会があったんですが、今ではそういうのもなくなってしまい、若いディレクターが「自分の作品だ」というものに出合えない現実があるという気がします。

さっき紹介があったように、「チェリまほ」とか「うきわ」とか30歳前後で、テレビ東京の連続ドラマのチーフ演出を務めています。今回、贈賞対象となった「silent」はフジテレビの局制作ですから、外部の風間さんにチーフ演出をゆだねたわけで、それぐらい風間さんの力量が買われていたのでしょう。期待にちゃんと応え、さきほどの賞状にもあったように音にも配慮した、ものすごく繊細な演出をみせました。俳優たちがみないいんです。主役の川口春奈さんと目黒蓮さんが素晴らしかったですね。

ちょっと思い返してみると、このお二人はＮＨＫの朝ドラに出ていました。川口さんは22年度前半の「ちむどんどん」、目黒さんはその後の「舞いあがれ！」にヒロインの恋人役で出ていました。ところが、ＮＨＫの人がいたら申し訳ないんですけれど、「silent」と比較したら、どっちの川口春奈がいいか、目黒蓮がいいかは言うまでもないですよね。この違いは、何なのか。

リアルな存在感とか演技力を役者から引き出すのは、（もちろん脚本の出来もありますが）現場の演出力が大きいと思うんです。

風間さんはテレビドラマだけじゃなくて、映画も視野に入れて、広い意味で映像を作るという気持ちを持っているようですから、是非とも、映像の世界で幅広く活躍していただきたいと思います。（拍手）

【受賞者のことば】　風間　太樹　氏

この度はありがとうございます。ドラマ賞の中で、演出というものに着眼して評価いただけることは多くないと思うので、演出に目を向けていただけてありがたいと思っています。

「チェリまほ」は僕が初めて連続ドラマを撮影することになった作品で、2年前ですけれども、あの時に思いきってドラマの世界にチャレンジして良かったなと思っています。

そのチャンスを与えて下さったのは、テレビ東京の本間かなみさん。フジテレビの村瀬健さんです。ぼくは、特別な実績があったわけでもなかったし、映画を主戦場にやってきたものですから、チャンスをいただけたことに驚きつつ、ただ瞬間的な出会いに恵まれました。お二人とも、僕の撮った映画を見て下さったり、企画書を挟んだ対話を通して、なにか作品を撮る時の寄り添う気概を感じてくださったのかな、という風に思っています。プロデューサーとの出会いは監督にとって大切で、僕の想いを大切に受け取り、併走してくださる方と出会えて、一緒に作品を作って来られて良かったなと思っています。

さきほど鈴木さんも仰ってくださいましたが、言葉として何か特別な演出をしているということは無いつもりでいるんですが、ただ、その人が持っている個性であったりとか、その人の思想に寄り添いながら考え、作品に閉じ込めてあげたいと、いつも思いながら演出しています。だから、誰よりもよく話しますし、彼女の良さ、彼の良さを知った上で、作品に昇華していきたいという思いはいつも抱えています。

これから僕はしばらく映画を撮っていくんですけども、ドラマも引き続き撮っていきますし、作品の作り方も映画とテレビドラマには垣根がないと僕は思っています。技術的なことも、まだまだ、できることがドラマの中でもあろうかと思っているので、シームレスに映画とテレビドラマをこれからも撮り続けていきたいと思います。今後とも宜しくお願いします。ありがとうございました。（拍手）

渡辺美佐子氏　花束贈呈とご挨拶

みなさまお久しぶりでございます。コロナでなにかちぐはぐでしたけれども、今日は無事にこの会が催されて、みなさんにもお目にかかれて嬉しゅうございます。ありがとうございます。

受賞者のみなさん、おめでとうございます。大山がいなくなってから今年で9年目でございます。今日はたくさん自分の名前を言っていただいてきっとさぞ喜んでいることだろうと思います。

大山は、ぜひ若い方たちにこの賞をあげていただきたいとの思いを持っておりましたので、本当にお若い方たちが受賞されて私も大変嬉しいです。

（会場の坊やへ）小田さんの坊っちゃんが今日のおかあちゃまの素敵な姿をきっと覚えていて下さるわね、良かったですね。（笑い）

なんだかすっきりしない世の中だけれども、これからもみんなを元気づけるようなお仕事、どうぞ、たくさん作って下さい。宜しくお願いいたします。

ありがとうございました。（拍手）

～　～　～

放送人グランプリ２０２３　贈賞経過

渡辺　紘史　贈賞委員長

さきほど会長も申しましたが、この賞は放送人による放送人のための賞で、放送人の会の会員が投票して、それをもとに贈賞委員たちが合議して決めるというかたちで、これまでやってきました。

今年の投票数は若干少なく、51の番組と個人に対して77票が投ぜられました。大部分の人が推すようなものがなくて、ばらけたということなんでしょう。「いいね、いいね」の同調圧力の中で、議論が極端化したり単純化するきらいのある、今の世の中にあっても、放送人の会の会員は誰にも影響されずに自分の考えで、独自の視点で投票したということでしょうか、ばらけた投票結果も当然なのかなと私自身は納得しております。

今回、最多の票を集めたのは、昨年一線の活動を休止すると宣言された歌手の吉田拓郎さんの7票でした。つづいて、渡辺あや脚本のドラマ「エルピス（～以下略）」に5票。これに、渡辺あやさんとプロデューサーの佐野亜裕美さんに投票した数を含めると、8票になります。それからもう一つは、投票期間中の2月25日に放送されたＥＴＶ特集「ルポ　死亡退院～精神医療・闇の実態～」に6票です。

そうした結果を踏まえ、大賞に何を選ぶのかを議論いたしました。

「エルピス～」については、発信する側、ものを伝えていく側、ここで言えば放送人、放送の裏側にいる放送人の逃れようもない責任について考察した極めて硬質なドラマであるという評価はありましたけれども、去年も同じ渡辺あや脚本で同じようなテーマのドラマ「今ここにある危機とぼくの好感度について」がグランプリ大賞だったので、2年続きで同じ作家の作品はどうなのか、と言う意見があり、それならいっそ渡辺あやさんに差し上げられないかとの意見もありましたが、ご承知のように渡辺あやさんは個人賞の受賞をずーっと拒んでこられた方なので、贈賞する側、受賞される側がともに喜んでいただけるというこの賞、放送人グランプリにとっては、どうなのかということもあり、最終的には「ルポ　死亡退院～」が大賞になりました。

実は、「ルポ　死亡退院～」も、同じスタッフが昨年、同じＥＴＶ特集「コロナ×精神科病棟」で優秀賞を取られたのですが、2年連続の受賞で、グランプリ大賞としたのは、スタッフが不正義を許さない、不平等を許さないという熱い思いを持ちながらも、取材においては、実に冷静に丹念に継続しておこない、現実の世界をこの番組によって変えていったと言う点を高く評価したためです。

今回、優秀賞を取ったＥＴＶ特集「久米島の戦争～」も、やはり丹念な取材と綿密な資料の読み解きで、いかにもＥＴＶ特集らしい地味だが実に丹念に事実を掘り起こしたことを評価いたしました。

今、G7で世界の大きなうねりについて、世界の首脳が議論をしているようですが、そういう世界の大状況に迫る大型ドキュメント、ＮＨＫスペシャルについては混迷の中にあってその本当の事実というか、或いは実情を掴みきれていないのではないかということなの

でしょうか、該当する番組を見つけることができませんでした。

一方で、まさに今のこうした世の中にあって、変わらぬかたちで自分のスタンスを守りながら、放送の自由、国民の知る権利に応え続けてきた「報道特集」を顕彰すべきじゃないかとの声が上がり、TBS「報道特集」を特別賞に推薦いたしました。

最後に、二つほど、申し上げます。

メディアの危機を直接的にかつしわ寄せ的に受けている、地方の放送局で必死に頑張っている人たちを昨年に続き今年も又、顕彰できたことは大変嬉しく思っています。今回は、広島のRCCラジオの野球監督を追ったドキュメンタリーと北海道の最東端の町・根室での町おこしと、自分の生きがいを見つめながら生きる地域の人たちを描いた番組、そしてカメラマンやプロデューサーを、チームとして顕彰できたことは嬉しいことだと思います。

最後にもう一つ。今年もエンタメ番組について選奨できなかったことは残念でした。放送人の会の創始者のお一人である川口幹夫さんが、NHKの会長時代に「良い番組とは三つの『た』である」と言っていました。「ためになる番組、たすけになる番組、たのしめる番組」、と。この「たのしめる番組」を見つけられなかったことは非常に残念です。来年こそは、ぜひエンタメ作品も顕彰できたらいいなと思っております。

長くなりましたが、以上です。（拍手）

放送人グランプリ2023 贈賞

会長より、表彰状とトロフィー、盾が贈られました。

グランプリ 優秀賞

RCCラジオ
「生涯野球監督 迫田穆成 ～終わりなき情熱」

中国放送ラジオ局次長兼制作部長
プロデューサー　増井 威司 氏

〈表彰状〉 野球の楽しみ方の一つに、監督が何を考えているかを推理するというのがあります。それはあたかも優れたラジオ番組を聴きながら、その展開を想像することに似ています。想像は何度も裏切られますが、それこそが野球の、そして番組の面白さに他なりません。

この番組は、高校野球界稀代の名将である迫田監督の采配と、その生き方、信条を深い取材で追いかけ、巧みな構成力で描き切りました。

まさに野球の醍醐味に迫ったこの力作を称えて、優秀賞を贈ります。

【祝辞・選奨理由】 木原　毅（委員）

野球の面白さというものは、何が起こるか分からないという面白さで、この面白さを私たちは今年のWBCで心ゆくまで楽しんだと思います。この面白さを何十年も前から追及されているのが迫田監督であります。

江川卓をいかに攻略するか、そのあり得ない迫田采配の、面白さ強さを、坂上俊次さんの巧みなインタビューから引き出して、増井威司さんを初めとするRCCラジオのスタッフがたくさん集めた素材を、その多くを捨てて完成させたのがこの番組だと思います。

本当に聞き応えのある良い番組を久しぶりに聴かせていただきました。ありがとうございます。

最後に、中国放送について付け加えておきます。ラジオでは最近、ギャラクシー賞のDJパーソナリティ賞を2回ほど受賞しています。増井さんもディレクターとして何度か色んな賞を受賞されております。RCCラジオはラジコやYouTubeで全国のリスナーを獲得して、大変な時期に大いに奮闘をしております。

これからも頑張って下さい。おめでとうございます。（拍手）

【受賞者のことば】 増井　威司　氏

中国放送の増井と申します。この度は過分な賞をいただき、またラジオの番組で唯一選んでいただいたこと、大変感謝しております。そして励みになりました。どうも、ありがとうございました。

ちょうど今、広島のサミットまっただ中でありまして、広島がこのような厳戒体制になることはなかったというか、日本でも初めてのレベルの警戒だと思います。警官の数たるや、1週間でピラミッドが1個ぐらいできるんじゃないか、というような体制です。実際、警察の大食漢で、町のお好み焼き屋さんがお好み焼き用のソバやキャベツが足りなくなるという、厳戒体制もひかれています。

一時期、危ぶまれていたバイデン大統領が来ることになり、それに紐づくようにゼレンスキーも広島に集結するということでニュース性も大変高くなっております。一方で、広島市民は岸田総理がノーベル平和賞を貰えるぐらいの行動力と仕事をして貰うよう、見守っているという状況でございます。

そんな広島は野球どころでありまして、今回の迫田穆成さん、迫田さんは選手で甲子園優勝、監督でも優勝した、名将といわれています。WBCの栗山監督も敬愛している監督さんということです。

今回一緒に仕事をしました坂上俊次アナウンサー（報道制作局スポーツ部次長兼アナウンス部）がテレビの番組で迫田さんをインタビューした時に、今田舎の学校（広島県立竹原高校）の監督をやっていると聞きまして、私どもの会社が昨年70周年になりますので、83歳の迫田さんの人生に、戦後の広島と弊社の歴史を重ねようとの企画をたてて、この番組を作りはじめました。

迫田さんの「弱いから勝つ」という禅問答のような信条ですが、弱い人間、弱い立場の者がどうやって勝つかを創意工夫する迫田さんの信条に深く迫って1本の番組にまとめました。今日、このような賞をいただいて、坂上はこれを機会に本を作りベースボール・マガジン社で出版することになりました、お手を取っていただければと思っております。

また、このような賞で聴いていただく機会が増えたことを感謝しております。どうも、ありがとうございました。（拍手）

坂上俊次（中国放送アナウンサー）著
「生涯野球監 迫田穆成
83歳、最後のマジック」
ベースボール・マガジン社

「グランドで死にたい」83歳、現役高校野球監督がYouTubeも駆使しながら、「ひとづくり」「町づくり」に挑む。発売日：7月1日

グランプリ　優秀賞

ETV特集

「久米島の戦争
～なぜ住民は殺されたのか～」

NHKメディア総局第2制作センター文化
　チーフ・ディレクター　奥秋　聡　氏
NHKメディア総局報道番組センター
　チーフ・プロデューサー　小池幸太郎　氏
NHKメディア総局第2制作センター文化
　チーフ・プロデューサー　東野　真　氏

〈表彰状〉　沖縄戦末期、日本軍守備隊約30人が守る島に1000人余りの米軍が上陸。守備隊は敵に通じていると疑って島民20名を殺害しました。76年後の2021年、それまでの沈黙を破り悲劇を風化させてはならない、と島民が立ち上がって「久米島町史」で87人が証言しました。

資料の掘り起しと丹念な聞取り調査を経て、番組の最後に紹介される加害者の娘の証言が胸を撃ちます。戦時にこそ露わになる、差別や交錯する加害被害の構造は、沖縄の戦争が過ぎ去った過去ではないことを教えてくれます。

この秀作を称えて優秀賞を贈ります。

【祝辞・選奨理由】　山登　善明（委員）

タイトルは「久米島の戦争」とありますが、この番組に流れている戦争は、鉄砲の弾も出てきませんし、爆弾の爆発もないという静かな戦争です。60分の番組ですが、あっという間に見てしまいました。

でも、何回見ても、分からないことがいっぱい出てきて、非常に奥の深い番組です。ぜひ、みなさんも見ていただくことをおすすめします。

いろいろエピソードが出てくるんですが、私が未だに心に残っているのは、一家を惨殺された朝鮮半島出身者と結婚した日本婦人の話です。子供が5人いて、一番上の子が多分小学校4年生か5年生で、そこからゼロ歳児までいる、その子供たちの記念写真が残っているんですが、そこには最後に生まれた子は写っていないんです。その子が生まれる前に撮られた写真なのです。最後の子が生まれてから写真を撮る余裕がなかったのでしょう。そして、その子の名前が分からないんです。久米島町史（2021年3月刊）には、その家の第5子しか書かれていない、そういう一家の写真が一枚残っているんですが、その写真を今、思い出しても胸が痞えるように思います。たった一枚の写真が、そんな風に出来上がっていく、その見事な構成力、取材力に圧倒されました。

縷々述べましたが、ぜひ皆さんに見ていただくことをお薦めします。

どうも、おめでとうございます。（拍手）

【受賞者のことば】　奥秋　聡　氏

NHKのディレクターの奥秋です。このたびは栄誉ある賞をありがとうございます。

私は6年前から5年間、NHK沖縄放送局に所属していてディレクターとして番組を作っておりました。沖縄に赴任して最初に番組にしたいと思ったのがこのテーマだったんです。それで、すぐに久米島に行って、当時のことを話せる方を探したんですが、ほとんどの人は話してくれませんでした。

そもそも久米島でなにが起きたかというと、太平洋戦争末期にアメリカ軍が上陸したけれども、特に攻撃することもなく元々いた日本兵とにらみ合っていて、その日本兵が住民をスパイと疑って殺してしまったという事件なんです。地元の住民の一部が日本兵に「あの人はスパイじゃないか」と密告をしているんです。スパイと言っても、アメリカ兵から物を貰ったり、交流していたのを、スパイとみなされたのです。結局、なかなか証言してもらうことができなくて、番組化をあきらめたんですが、2年前「久米島町史」が出版されたことで、番組にすることができるようになりました。

「久米島町史」は、久米島博物館の学芸員の人たちが、この機会を逃すとこの歴史が無かったことになってしまうとの危機感から、何年もかけて証言の本を出したのです。

町史が出版されたことで、自分も話さなきゃという気持ちになってくれた方が多かったんだと思います。そういう方々も、身内に密告に関わった人や日本軍に近い人がいたりして、証言するのに勇気がいることだったと思います。そういう方々の勇気に支えられて、番組はできたと思っています。

番組の中では、久米島の方々の話を聞くだけじゃなくて、加害の立場の日本兵の足どりを探して、ある遺族の方に会えました。その女性は、お父さまが久米島に行って住民虐殺に関わったことを全く知らなくて、それでも何があったかを知りたいと、取材を受けて下さいました。その方は殺害の事実を知りカメラの前で泣き崩れてしまって、私としては取材によって人を苦しめてしまい本当に良いのかなという葛藤を持ったんですが、最終的にはその方も「知って良かった、知らないでは遺族の方に申し訳ない」と取材を受けて下さいました。インタビューの終わった後には、「久米島に行くにはお金が幾らかかるのですか、お金を貯めて久米島に慰霊にいつか行きたい」とおっしゃいました。

取材に応じてくれた皆さんの語る勇気に支えられて番組を作ることができたと思います。これからも、人々の証言を集めて残すことを、番組作りを通してやっていきたいと思います。

このたびは、どうもありがとうございました。（拍手）

【受賞者のことば】　小池　幸太郎　氏

NHKの小池と申します。去年まで沖縄放送局でプロデューサーをしておりました。

沖縄局に行く人間の一番大事な仕事の一つ

が、本土と沖縄の温度差を感じて、どう埋めるかという仕事がありまして、この日本軍の加害性みたいなことに触れる中で、かえって溝が深まるんじゃないかという不安もありながら、奥秋君にまかせて、こうして評価をいただいたことを大変嬉しく思います。

私の番組を家族はほとんど見ないんですが、家族が毎週楽しみにしている「ブラッシュアップライフ」や「silent」の関係者の方たちと同じ壇上に立てることが大変嬉しく思いまして、今日、家族の分断を埋めるべくちょっと自慢しようと思います（笑い）。

本当に今日はどうもありがとうございました。（拍手）

グランプリ 特別功労賞
吉田 拓郎

代理受賞者
ニッポン放送 コンテンツプロデュースルーム
担当副部長
番組プロデューサー 冨山 雄一 氏

〈表彰状〉 60年代の「政治の季節」の終焉と共に始まる70年代に船出した貴方は、新しい「音楽界の常識」を作り出しました。「全国ツアーリサイタル」「大規模野外ステージコンサート」「カバーアルバム」などの原型は、まさにこの時期の貴方によって作られたものです。

また、聴き手との接触はコンサートとラジオだけと主張した貴方は、深夜放送全盛期から昨年までの半世紀以上にわたり、「パックインミュージック」「セイヤング」「オールナイトニッポン」などで若者達と熱い交流を持ち、多大なる影響を与え続けました。

昨年活動の休止を宣言した貴方の長年の功績を称え、特別功労賞を贈ります。

【祝辞・選奨理由】 三原 治（委員）

吉田拓郎さんの出席はかなわなかったのですが、拓郎さんからコメントをいただいております。後ほど、ご紹介いたします。

拓郎さんの偉大さ、偉業は、今さら語ることではありませんが、音楽界における功績はJ－POPの礎を作ったといっても過言ではないと思います。

ラジオとの関わりでは、表彰状にある通りで「パックインミュージック」などの3大深夜放送のパーソナリティを担当したことです。これは拓郎さんただ一人です。

拓郎さんはライブコンサートでの話が面白かったので、その話の旨さがラジオで活かされ、シンガーソングライターの喋りとしては大きな評判を呼び、その後の谷村新司さん、南こうせつさん、松山千春さん、さだまさしさん、中島みゆきさんなどに繋がっていきます。

ラジオの深夜放送のDJを「パーソナリティ」と呼び始めた頃から、各局はこぞってフォークシンガーを起用しはじめました。当時、巨大メディア化するテレビに対して、ラジオは若者のパーソナル・メディアとしての存在に、その生き残りをかけたのです。一方で、ラジオはテレビ出演を拒否する拓郎さんなどフォークシンガー達の発言の場所でもありました。

拓郎さんは自分の内面や生き方をちゃんと番組の中で晒していきました。だからこそ、パーソナリティーとリスナーの距離が近くて濃密な関係を築けたのです。その関係性は、現在の深夜放送にも生き続けています。

本日はニッポン放送の冨山さんにお出でいただいております。拓郎さんとニッポン放送との関わりなどを語っていただきます。宜しくお願いします。（拍手）

【受賞者のことば】 冨山 雄一 氏

ニッポン放送の冨山です。吉田拓郎さんの代理で今回出席させていただいております。

吉田拓郎さんに受賞のお知らせをしましたところ、大変喜んでおりまして、くれぐれもよろしくお伝え下さいと伺っています。

ニッポン放送と吉田拓郎さんは70年代に「オールナイトニッポン」でご一緒しまして、そのあと、番組が終了しては復活してというかたちで、80年代、90年代、00年代、10年代、そして20年代ですね。「オールナイトニッポン」は、番組が開始して56年目に入っているんですが、すべての年代でパーソナリティを担当していただいているのは、吉田拓郎さんだけとなります。

2020年4月から月に1回「オールナイトニッポンGOLD」のパーソナリティを担当して頂いたのですが、番組がスタートした時期と緊急事態宣言が出たタイミングがちょうど重なりまして、番組をやるのはなかなか難しいですかね、とお話ししたところ、やりたいとおっしゃっていただいて、2年半ほど、ご自宅でお一人で収録した素材を僕に音声データで送って貰って、後からビタースイートサンバのテーマ曲とかジングルをのせる形で番組を作っておりました。

昔はスタジオに来ても、一人で話す内容を考えて葉書を読んで1人で選曲していたと拓郎さんは話してくれまして、やっていることは今も何も当時と変わらずに、自宅で選曲して、僕からメールでメッセージ（葉書）を送って、というスタイルなのです。

ラジオの良さを、若い頃からつい最近まで、生涯を通して発信していて下さっていて、リスナーに本当に寄りそって下さる方なので、引き続き何か機会があればラジオでやろうとおっしゃってるので、何かやれればと思っております。

本当に、この度の受賞ありがとうございま

した。（拍手）

【受賞者のメッセージ】

70年代の初期、私がマイナーなレーベルから音楽デビューした瞬間から、ラジオという世界に居心地の良さを実感しておりました。そこは、まさに私の発する音楽が生き生きと呼吸できる世界だったのです。

ラジオと共に生きた50数年の音楽人生を誇らしく思います。

そしてラジオという世界が、これからも永遠に輝き続ける事を心から願っております。

ありがとう！ ラジオ！ 楽しかったよ。

2023年 春 吉田拓郎

グランプリ 特別賞

「無理しない ケガしない 明日も仕事 ～新根室プロレス物語～」制作チーム

北海道文化放送 取締役 メディア本部長 吉岡 史幸 氏

フリーカメラマン 芦崎 秀樹 氏

【表彰状】 この番組は、根室で暮らすフリーカメラマンと地元放送局が絶妙なタッグを組み、成し遂げた、笑いあり涙ありのエンターテイメント・ヒューマンドキュメンタリーの秀作です。なかでも、心を病む孤独な人たちの自虐ネタとも思える会話は秀逸です。互いを思いやりながら、したたかに生きる姿を捉えた映像も、同じ町で暮らす撮影者にしか記録できない感動的なものでした。

金も人も無い厳しい経営環境にあって、如何に地域ジャーリズムの持続可能性を探っていくか、制作にあたったプロデューサーとカメラマンの今後を期待して特別賞を贈ります。

【祝辞・選奨理由】 林 健嗣（委員）

北海道からはるばる、私も来ましたけど、受賞、おめでとうございます。

今回、この賞を贈ることは本当に光栄に思います。いま、短くまとめた番組の映像を見ていると、バラエティー番組のように見えるかも知れませんが、これはしっかりしたエンターテインメント・ヒューマンドキュメンタリーと言えるものだと思います。非常にあったかいドキュメンタリーで、北海道から全国に向けて展開できる企画番組の成功、ありがとうございます。

特に、カメラマンの芦崎さんがドキュメンタリーを制作するのが初めてで、さらにナレーションをするのも初めてという初めて付くしで、放送人グランプリの表彰式の壇上に初めての方が立つ、これは実に珍しいことだと思うんです。今、話題のロシアとすぐ近くの町に暮らすカメラマンが、地元のプロレス団体を見つめながら3年間に渡って記録して、それを吉崎プロデューサーがニュース企画からはじめて単発番組にして放送し、全国に配信して、そして映画化を目論み準備をすすめているわけですね。

さきほど聞きましたら、既に映画化の資金も集まったということで、地方の番組としてはレアなケースかも知れません。

ＮＨＫでもキー局でも同じなんですが、地方暮らしでその地元でカメラを回しながらニュースを送っている人は、芦崎さんばかりじゃなくたくさんいるんです。町の人たちのドラマを発掘して、それを撮り続ける、そのカメラと住民との距離感は、東京からポンと行ってカメラを向けるスタンスとは全く違う、あったかいスタンスを持って見つめています。

さきほど、何度もカメラを回しながら泣いたんじゃないですか？と聞きましたら、いやいや泣きませんよ、たった一度ですよと言われてですね、（芦崎さん、「2」のサイン。）えっ！2度ですか⁈ それは後で話して下さい。

ともかく、芦崎さんは10年前までコンビニエンスストアを経営しつつ、ずっとカメラを回しているという半農半漁じゃないですが、そういう姿でカメラを回してこられて、今回、贈賞出来るということは、僕は光栄に思います。これからも頑張ってほしいと思います。

ただし、その裏には吉崎プロデューサーのような、いい話を拾って、それを物語にして立ち上げていくプロデューサーがいなければできないことなのです。この作品はこのコンビがあってこそできたものと思います。もちろん、ほかにもたくさんのスタッフがおりましょうが、今後もこう言う形のものを作っていけるならば、地方のドキュメンタリーも持続可能じゃないかという気はします。そういう意味でも、これからも頑張っていただきたいと思います。

おめでとうございます。（拍手）

【受賞者のことば】 吉岡 史幸 氏

この度は私どもの小さな作品なんですが、このような立派な栄えある賞をいただきまして嬉しく思っています。ありがとうございました。

「Silent」や面白いドラマのスタッフのみなさんと、こうして一緒に賞をいただけることは本当に光栄だと思っています。

いま林さんから説明がありましたけども、この作品はもともとドキュメンタリーとして作ろうと思っていたわけではなくて、芦崎カメラマンがニュース用の素材で時々、こつこつと撮っていたものを、ニュースの企画として流していたものです。番組の中でも使っていますが、芦崎カメラマンが主人公に「最後のインタビュー」をしているシーンがあって、それを私がニュースで見た時に、このインタビューはなかなか無いな、普通の記者とかディレクターは、このインタビューは録れないだろうと思いました。それがすごく印象に残りました。

その後、この主人公が亡くなった時に、芦崎の方から「これ、番組にならないか？」と相談を受けまして、もともと私はニュース担当で、根室のカメラマンとしてずっと取材をしてくれていたので、昔から面識があったので、素材を見せてもらったところ、インタビューもそうですけど、サムソン宮本さんという主人公が非常に魅力的な方だと分かったのと、プロレスが題材ですがプロレス独特のギミックというか、主人公自身がプロレスを演出しているかのような独特の味わいのある素材がたくさんありまして、これなら番組ができるんじゃないかと思って、スタッフみんなと番組制作にとりかかって、こう言う形にまとめて作品になりました。

私どものローカルテレビ局は人材が少ない

ので、いつも記者やディレクターがドキュメンタリーを制作すると言うことでは無くて、以前にも、カメラマンをディレクターに器用したり、スポーツのアナウンサーが取材したニュースを見て、これは番組になるとアナウンサーが作り上げていくことがありました。

どうしても、記者やディレクターの取材している素材は社会問題などの真面目な番組が多いのですが、カメラマンやアナウンサーの素材というのは、人、人物にかなり深く刺さっている素材が多いんです。それは、取材者と取材対象者の関係性がカメラに映し出されているようなもので、そういうのを見た時に非常に楽しいし面白いと思うのは、我々、地方で働いている人間ならではの特典というか醍醐味だと思いながらドキュメンタリーを作らしていただいています。

今年の根室は、他にもいろいろ事件があって大変でした。去年の知床観光船事故、そして韓国ソウルの梨泰院（イテウォン）での圧死事故、その被害者が根室出身でした。そういう取材に芦崎は、去年は大活躍で、こうやって幾つかの賞もいただいて、本人はこれでもうやめてもいい、もう充分だと言い始めているんですが、「ちょっと待ってくれ！　もう少し一緒にやろうよ!!」と今説得している最中でございます。（拍手）

本日、受賞式を見ていて思ったのですが、沖縄ではいろんな素晴らしいドキュメンタリー作品が作られているんですが、北海道も実は北方領土の問題があって、根室はもともと北方領土間でロシアと向き合っている地域で、この芦崎も歯舞諸島の多楽（タラク）島の2世なんです。沖縄の作り手さんたちに比べて、北方領土の問題は我々北海道のマスコミは最近あまり取り上げていない状況で、どんどん人が亡くなっているんですね、だから、そこは怠慢だと、久米島のドキュメンタリーの人のお話しを聞いていて思いました。もう少し、私どもも北方領土の問題、もう一度掘り下げてやらなきゃいけないなと思った次第であります。ありがとうございました。（拍手）

【受賞者のことば】 芦崎　秀樹　氏

こんな素晴らしい場所に立って緊張というかドキドキしています。さきほど林さんがナレーションの話をしていましたが、私、ナレーションの収録に3時間かかりました、それほど喋りが苦手です。

地方にいて取材をしていますと、大体取材というのは事件とか事故とか悪いことが多くて、良いことでの取材はあまり無いんです。この新根室プロレスは17年秋に、アンドレザ・ジャイアントパンダの登場で人気が弾けて全国的な話題になりました。僕は神社のお祭りの役員をずっとやっていて、プロレスをやる前から、根室在住の社会人仲間の彼らを知っていました。05年に中古のリングを買って、プロレスをやり始めた時は駐車場とかでやっていたので、あまり見たことは無かったんです。それが着ぐるみパンダのレスラーで弾けて、番組を作ることになり、プロレスに詳しい編集マンに入って貰って取材を始めたら、サムソン宮本さん本人がガンになっていると分かって、そこからドラマが始まりました。

宮本さんの死は悲しかったのですが、新根室プロレスの取材自体は楽しく、東京にも何回も行って、このような賞なども貰えたりとか、大変光栄でございます。ありがとうございました。（拍手）

グランプリ　特別賞
「報道特集」

TBSテレビ　報道局　報道番組部「報道特集」

編集長　曺（ちょう）　琴袖（くんす）　氏

プロデューサー　吉岡　弘行　氏

〈表彰状〉　報道特集は40年以上に亘り、世界や日本の今を伝え、国民の知る権利に応えてきました。時々のニュースの背景に至るまで、スタッフが現場に出向き、取材や調査で得た事実や生の声を自らの言葉で伝えます。

ウクライナでは戦争の悲劇のみならず、国家によるフェイクニュースというメディアの危機を取り上げるなど、伝え方は多角的でタイムリーです。

国内では、政府や権威筋の発表を鵜呑みにせず、裏を取り、時に常識とは異なる情報を提供、まさに不偏不党、真実及び自律を保障することにより、表現の自由を確保し、健全な民主主義の発達に資するとする、放送法の精神を体しています。この報道特集制作の皆さんに特別賞を贈ります。

【祝辞・選奨理由】 渡辺　紘史（委員長）

表彰状で触れた放送法は、ご承知のように、戦前メディアが戦争に協力した反省から、一九五〇年に作られました。その3年後にテレビ放送がはじまって、今年70年になるわけですが、言ってみれば民主主義を国民に根付かせようというメディアとしてテレビは誕生したもので、テレビは放送法の申し子だと思っているんです。

それが70年経って、実は革新とか維新とか刷新と言いながら、民主主義の流れを押しとどめよう、退潮をめぐらそうとする勢力があることは事実だと思います。いま、報道の自由度で日本は世界基準からずいぶん遅れをとっています。ジェンダーフリーなど、多様性を認めて寛容な世界を創っていこうという点でも劣っているのが現実だと思うのです。

そういう時代にあって、金平茂紀さんや日下部正樹さんが皆さんの後ろにまわって、皆さんを見守るというか支える立場に回っている今、曺さんや皆さん、より若いスタッフも含めて、（語弊を恐れずに言えば）、皆さんは、民主主義を守る・新しい守旧派として、今後とも頑張っていって欲しいというのが私の願いであります。

どうも、おめでとうございました。（拍手）

【受賞者のことば】 曺　琴袖　氏

私どもの番組は見ると暗い気分になると言われるのですが、本日は、視聴者の皆さんにエンターテインメントで感動や喜びを届けてきた番組とともに、「報道特集」が栄えある賞をいただきまして本当に感謝しております。何よりも励みになります。

内定の連絡をいただいた時に、私たちの番組の中で、どういう内容が評価されたのかを伺いましたら、「ウクライナ侵攻」、「旧統一教会と政治」のキャンペーン報道、「総務省の文書問題」、この三つをあげていただきました。

「ウクライナ侵攻」では、戦争の現実を伝えることよりも、スタッフの命を危険にさらすリスクを避けることを優先する、そんな現在のメディアのありようが問われているのだと思います。

「旧統一教会と政治」では、90年代にも大きな問題になりました。私は入社前でしたが、92年に芸能人の合同結婚式問題で報道がすごく加熱した時がありまして、TBSが放送した時に、3万件の無言電話を受けました。今回のキャンペーン報道の中で、当時、無言電話をかけていたという元信者さんを実名顔出しで取材することができまして、無言電話は旧統一教会が組織的にやらせていたことが明らかになりました。

あえてここで、宗教団体とは言いませんが、宗教を名乗る団体を取り上げるのは、メディアとして非常に難しいことで、取り上げてもジャーナリズムやメディアの世界で評価されるテーマではないと感じてきました。しかし、去年の安倍元総理襲撃事件があって、あの団体がこれほど何人もの総理経験者と密接なつながりがあり、政治と深く長く広く関わりがあると分かった時に、この問題を放っといていいのか、報道を名乗るメディアなら当然やるべきテーマだという問題意識があり、報道するメディアが少なくなっている状況に非常に危機感を感じながら、いつも放送を出しています。

そんな時に明らかになったのが、「総務省の文書問題」でした。この文書では、二〇一五年当時放送メディアに対して、政権が「この放送は偏っているぞ」と簡単に言えるような方向性に向かわせようとしていた事が明らかになったのです。報道に携わる人たちは前から感じていたと思うのですが、こういう圧力に対してはメディアが一丸となって声をあげていかなければいけないと思います。団体が正体を隠しながら政策や教育現場を左右しても、「放送が偏っている」という一言で一向に問題にされない、問題にすることができないような空気になってもいいのか、ということです。総務省の文書問題を真正面から取り上げるメディアが少なくなっているので、日々、大きな緊張と責任感を感じながら放送を出しています。

私たちの番組姿勢を評価していただけることは非常に励みになります。頑張れという声だけじゃない中で、スタッフも一生懸命やっておりますので、こういう賞をいただいたということが、メディア界、放送人界の中でもバックアップしていただけるんだと感じられます。

最後に私が放送を出す中で、元気が無くなった時に自分に言い聞かせている言葉があります。ウクライナの取材の時に、ノーベル文学賞を受賞したアレクシェービッチさんが私たちの取材に応えて下さった言葉なんですが「時に言葉は無力だと感じることもあります。私はその絶望に負けたくはありません。」

『言葉』という文字を『放送』に置き換えて、日々放送を出していきたいと思っております。

本当にどうもありがとうございました。（拍手）

【受賞者のことば】 吉岡　弘行　氏

吉岡でございます。先ほどから（曺編集長の）写真を撮りまくっていますが、本日は曺編集長の〝アシスタントプロデューサー〟をしております。（笑い）

43年続く番組ですので編集長も色々です。普通、編集長とディレクターは職域が全く違います。テーマを決めて、ディレクターに取材の指示を出すのが編集長の主な役割です。ただし、〝スーパー編集長〟といわれる彼女の場合、それでは済みません。編集長をやりながら、ディレクターとしてVTR取材し、時には自分で編集までやってしまうんです。

番組の一週間の流れを申しますと、大抵、日曜日に「今週はこういうネタをやりたい」とか「先週、あの人が提案したネタはやらなかったけれど、気にかかる」といったメールが曺編集長から回ってきます。で、各ディレクターは興味のあるネタをリサーチして、火曜日の全体会議に臨み、『特集1』のテーマを決めるんですが、自然と、喧々諤々、ああでもないこうでもないと、いい感じの自由な議論がスタッフの中で生まれていって、土曜日の放送に向けて走り出していきます。

さきほど彼女が挨拶であげたテーマは、いずれも本人が強くこだわったものです。「今週は放送法問題をやらないわけにいかない」、「旧統一教会問題はとにかく色んな角度で続けましょう」とか。旧統一教会問題は、数えて20回になるでしょうか。

もっと手の内を晒しますと、例えば、放送法の企画だと政治家の取材が金曜日に発生したり、金曜じゃないと識者の都合がつかないとなって、その日は大体徹夜です。MA（ナレーターの読み込み）は放送当日の10時から。弁当をかきこみ、午後1時からキャスター陣にVTRを2本（特集1と特集2）見ていただいて、忌憚のない意見を言ってもらう。実際の放送では2分ぐらいでコメントをまとめないといけないんですが、決してこちらが、こう喋ってくれと誘導するわけでもなくて、キャスターと担当ディレクターが一緒になって比較的自由にコメントを練りあげていくという作業をやっています。

僕は今ぐらいの時間（午後5時前後）になると、スーパーチェックという地味な作業があって、VTRの字幕に誤字脱字がないか最終チェックします。また、番組の冒頭に20分ほどデイリーニュースがありますので、時には「朝からやってるこのネタはもういいんじゃない。落として、〝受け〟（特集のコメント）に尺をくれよ」とか、そうした交渉をニュース担当の編集長としたりしています。

そんなわけで、曺編集長はこの43年間で、編集長に専念せずに、どっちらかと言うとディレクターとしての能力を最大限に発揮している稀有な存在だと思っています。ニュース番組は共同作業なんですが、誰か一人、とにかく一人、強く引っ張っていく人がいないとうまくいかない。多分ドラマやバラエティーでも同じでしょうが、仲良し集団だとうまく行かないと思うんです。ですから、今回「報道特集」が賞をいただけたのは、彼女の功績が大きいということを強調しておきたいと思います。

最後に、曺さんがアレクシェービッチの言葉で挨拶をしめたので、私は敬愛する音楽家

の坂本龍一さんで。教授は自伝に「音楽は自由にする」というタイトルをつけています。今回の挨拶は、これを「放送は自由にする」という言葉にかえてしめたいと思います。

今後も〝自由な気風〟を保って、いい番組を作っていきます。

どうもありがとうございました。（拍手）

表彰状　放送人グランプリ　大賞

ＥＴＶ特集「ルポ　死亡退院

～精神医療・闇の実態～」殿

このルポルタージュは、内部告発による映像や音声記録、患者リストを入手し、しかも長年に亘る地道な調査取材で精神科病院の「闇の実態」をあぶり出しました。

特筆すべきは、問題の解決に一歩でもつながるようにと、番組単体ではなくニュースと連動したことです。その結果大きな注目を集め、看護師が患者への暴行の疑いで逮捕され略式起訴になり、監督する東京都も改善命令を出す事態となっています。

これからの公共放送が担うべき調査報道として、画期的なこの番組に対し大賞を贈賞します。

二〇二三年五月二十日

一般社団法人　放送人の会

会長　今野勉

グランプリ　大賞

ＥＴＶ特集

「ルポ　死亡退院

～精神医療・闇の実態～」

ＮＨＫメディア総局　第1制作センター　福祉

チーフ・プロデューサー　真野　修一　氏

第2制作センター　文化

チーフ・プロデューサー　梅原　勇樹　氏

大阪放送局コンテンツセンター　第3部

ディレクター　持丸　彰子　氏

第2制作センター　文化

チーフ・ディレクター　青山　浩平　氏

グランプリ大賞トロフィー

【祝辞・選奨理由】菅野　高至（委員）

真野さんと青山さんのお名前を記憶にとどめたのは、今から5年前のＥＴＶ特集「長すぎた入院　精神医療・知られざる実態」でした。

福島の原発事故で、近隣の精神科病棟から急遽、避難転院した患者たちへの取材から、隔離収容する必要のない人たちが、何の役にも立たない治療をうけて30年、40年の長期入院を強いられていた実態を訴えた番組でした。

まことにＮＨＫ大阪の福祉番組班らしい作品で、弱者に向き合う優しさ、人間をみつめる眼差しの深さ、飽くなき取材のねちっこさに感動しました。

かつて私もＮＨＫ大阪でドラマを作っていまして、その折り、部落差別や在日コリアンなど様々な弱者に関わることで、人の紹介からことばの考証まで、いろんな相談に駆け込んで、助けて貰ったのが大阪の福祉班でした。

この伝統が、今回の「ルポ　死亡退院」でもつながっているのだと思います。

実は、今回の選考会議で、私、2年続けてグランプリの贈賞は受け入れられないだろうと考えて、グランプリ大賞に日本テレビのエンターテインメント番組を推薦しました。ところが、会員、贈賞委員に、このルポを大賞に強く推す方々がおりまして大賞に決定しました。

ＮＨＫの放送番組がおしなべて頼りなげになっている、受け狙いで迎合して、本音本質を避けてオプラードにくるんでしまう、そんな番組枠と番組が増えている中で、鈍重なまでに正しいことを伝えようと格闘しているＥＴＶ特集「ルポ　死亡退院」は、まさに大賞にふさわしいと思います。

若かりし頃、ドラマ人間模様で「太陽の子」というドラマを作っていた時、一九八二年に精神医療の考証で、八王子の「丘の上病院」という精神病院にお世話になったことがあります。院長が慶応大の出身で、作家・なだいなだの後輩でした。日本で初めての「24時間完全開放」の精神病院で、塀も鉄格子もなく出入り自由で、患者さん同士の恋愛も自由という、軽度の患者が対象とは言え理想を求めて、管理隔離を拒んだ、「滝山病院」とは対極の病院でした。今回調べてみたら、26年間の活動で95年に閉院して、理想は潰えていました。

もう一つ、この病院とも通じるのですが、最近見た映画で「アダマン号に乗って」というドキュメンタリー映画があります。ベルリン映画祭の金熊賞受賞作品で、パリ、セーヌ川に浮かぶ船の形をしたデイケアセンター「アダマン」の日常を記録したものです。朝の6時から夕方の6時45分まで、精神疾患をもつ患者たちがやってきて、医療者とスタッフが見守る中、患者たちが一日のスケジュールを決めてゆったりと過ごしていく。

パンフレットを読んだら、監督は「アダマン」はフランスの中でも「奇跡的」で、公的な精神医療は悪化して、予算削減で人員不足になり、介護者が単なる警備員になりがちで隔離室と身体拘束が復活する状況が創作動機になったと語っています。フランスも儲かる精神病院になっているようです。

日本の精神医療が本当に豊かになるために、今後も続編を含めて、息長く取材し番組を作り続けて下さい。

本日は、どうもおめでとうございます。（拍手）

【受賞者のことば】真野　修一　氏

この度は栄えある賞をいただき、ありがとうございます。昨年もこの「放送人グランプリ」で優秀賞をいただいたところ、同じチームで続編として制作した番組で再度選んでいただき、本当に光栄です。

前回はコロナ禍の精神科病院を1年取材し、精神疾患のある人の医療格差・その実情を訴えた番組でしたが、その取材の中で青山と持

丸ディレクター2人がつながったのが、今回の番組にご協力いただいた相原弁護士や内部告発をして下さった方々です。みなさんの勇気ある告発とお力添えで、私たちの想像を超える酷い実態が『滝山病院』にあると分かり、1年以上にわたって取材を続け、番組として放送することに至りました。

前回も申し上げましたが、「ETV特集」や我々がふだん作っている福祉番組は視聴率は非常に低く、なかなか社会に動きを生み出すまでには伝わらないというジレンマもあります。さらに、この精神医療をめぐる問題というのはあまり関心を呼ばないためか、報じられることがあまりありません。今回は、これをなんとか打破しようと、放送の設計段階からニュースと連携して、『ニュース7』で3日連続で報じられるような事実を揃えて、放送を迎えようと考えて準備してまいりました。

記録された映像や音声は二〇〇〇時間以上の記録があったんですが、それを寝る間も惜しんで、2人のディレクターが丹念に読み解いてきました。それは本当におぞましい内容で、見たからには伝えなくてはならない内容でした。ただ、これを「あるひどい病院があるだけだ」ということで終わらせるのではなく、家族であったり、他の精神科病院、そして行政が頼っていたりと、〝本人以外が皆幸せ〟であるために社会が生み出している構造、自分たちとつながっている問題だということを伝えたいと作ったつもりです。

今回の取材では、我々は病院の中には一歩も入っていません。相原弁護士と、勇気を持って内部の記録を送り続けて下さった人たちに、こうした賞をいただけたことで、少しは報いることができたかなと思っております。そして、記者の力もあって、厚生労働大臣がこの問題に言及したり、国会での質疑もあったり、また新聞各社や民放各局の報道が続いたことで、日本の精神医療が少しだけでも変わる一歩にはなったのかなと思っています。同時に、我々メディア、そして報道の力でできることはまだまだあるんじゃないかと改めて思いましたし、勇気づけられました。

ただ、今回暴行した看護師は逮捕・書類送検されましたが、病院の責任は法的には問われておらず、これまではそうした構造の中で問題が繰り返されてきたという歴史もあります。今後、もう一歩さらに踏み込んだ取材を続け、このループを断ち切ることにつながるような放送を出せたらと思って取り組んでおります。

本日は、どうもありがとうございました。

（拍手）

【受賞者のことば】 持丸　彰子　氏

この度は賞をいただき、本当にありがとうございました。

いま、真野からも話がありましたけれど、私たち制作チームだけではなく、相原弁護士もそうですし、病院の中で本当にこれをちゃんと伝えたいと強く思って下さった方々のご協力で、この賞があるのだと思っています。

このいただいたトロフィーが結構、ズシリと重いんです。これは、亡くなった人たちの思い願いがここにあるからかも知れません。取材している1年間、あの病院で、どんどん人が亡くなっていく様を、提供された内部告発の映像や音声をずっと見続けてました。取材をしていて、こんなに苦しかったことは初めてです。ディレクターとして自分は本当に無力だ、と思いながら取材をしていました。

これ以上の犠牲者を出さないように、引き続き取材を頑張りたいなと思っています。

どうも、ありがとうございました。（拍手）

【受賞者のことば】 青山　浩平　氏

この度は、栄えある賞を本当にありがとうございました。

取材に至るまでを、さきほどご紹介いただきましたけれど、僕自身は二〇一六年ぐらいから精神科の取材をしています。取材する中で、支援者の方々やドクターの皆さんと「この現状を見てしまったら、見て見ぬ振りはできないよね」とよく言っているんです。今回も、同じでした。

さきほど持丸が申しましたが、退院が間に合わなくて亡くなった人たち、病院を出られてから亡くなった人たち、そうした方たちの無念をずっと思いながら…（泣く）…制作しております。泣くつもりは、無かったのですが、もっとこの実態を知ってほしいと思いながら、取材を続けて参りたいと思っております。

本当に、ありがとうございました。（拍手）

閉会の辞

今野　勉　会長

毎回、感じることなので、同じようなことになってしまいますが、お許し下さい。

僕も長い間、60年以上現場でやっているので、その分、番組がどうやってできるかが分かります。どれだけ、悩みがあったり迷いがあったりするかは骨身に染みて感じてはいるんですけれども、あらためて皆さんの番組作りの様々な話を聞くと、僕はそんなに柔ではないんですが、それでも胸にくるものがありますね、「そうだ！　みな、まだ頑張っているんだな」と。

勿論、そういう制作者たちの思いに応えて我々がこういう賞を作ったし、普段の活動もしているんですが、あらためてこういう賞を贈ることができて、ありがとうございましたと、こちらからお礼を言いたい思いです。

今日は、どうもありがとうございました。

（拍手）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

２０２３年度放送人の会総会

開催日時　23年5月20日
　午後1時30分から午後2時45分
開催場所　東京都千代田区紀尾井町1の1
　千代田放送会館
出席社員数
総社員数　２１１名　出席社員数　１３６名
内訳　本人出席　３３名
　委任状出席　１０３名
総社員の議決権数　２１１個
出席社員の議決権数　１３６個
議　長　会長　今野　勉
出席役員
　会長　今野　勉、
副会長　前川英樹、渡辺紘史、
理事　石橋映里、小川和之、加賀美幸子、
　柏木登、木原毅、工藤英博、小池勝次郎、
　近藤邦勝、菅野高至、鈴木典之、鈴木嘉一、
　田中秋夫、永田俊和、西村与志木、林健嗣、
　深尾隆一、逸見京子、三原　治、村上雅通、
　八木康夫、矢島良彰（24名）
監事　河野尚行、長尾展光（2名）

［議事の経過の要領及び結果］

議長は、開会を宣し、上記のとおり定足数にたる社員の出席があったので、本総会は適法に成立した旨を述べた。

議長は本総会開会に当たり、第10期事業全体の総括を行った。

（監査報告）

議案の審議に先立って監事　長井典光より、監査報告書記載のとおり第10期事業報告及び計算書類、並びに本総会で審議される事項に関して提出された報告書類は適法かつ正確であることを認める旨の報告があった。

（報告事項）

第10期事業報告の件

総務委員長より、第10期（2022年4月1日から2023年3月31日まで）における、当法人の事業の状況につき詳細な報告があった。

～総務委員長・報告～

２０２２年度は、２０２１年度に引き続き新型コロナ感染が終息しない中で新年度事業がスタートした。

結果的に、放送人の会の事業活動も大きな影響を受け、事業計画で予定されていた各事業も縮小や延期、見直しなどを余儀なくされた。

そうした困難な状況の中で、徹底したコロナ感染対策を施し、各プロジェクトメンバーの強い思いと努力、会員各位の協力・支援を得て、「名作の舞台裏」や「放送人グランプリ」などの事業を実施したほか「放送人の証言の収録」、および「デジタルアーカイブプロジェクト」を発足させてｉＵ（情報経営イノベーション専門大学）との共同事業により第１弾として、30人のインタビュー映像をYouTubeにリリースすることなどができた。

また、年４回の会報発行を中心とする広報活動やラジオプロジェクトオの「聞き酒の会」の実施など可能な限りの事業を積極的に推進した。

第10期（2022年度）事業報告

【事業】

2022年度・21年度予算収支比

科　目	当年度	前年度	増 減
Ⅰ 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
（1） 経常収益			
① 受取年会費	（ 2,320,000 ）	（ 2,485,000 ）	（ △ 165,000 ）
② 受取寄附金	（ 2,232,176 ）	（ 3,208,626 ）	（ △ 976,450 ）
受取寄附金	224,000	159,000	65,000
受取寄附金振替額	2,008,176	3,049,626	△ 1,041,450
③ 事業収入	（ 1,238,000 ）	（ 1,100,000 ）	（ 138,000 ）
放送番組センター共同事業費	600,000	600,000	0
イベント収入	138,000	0	138,000
放送人の証言	500,000	500,000	0
④ 雑収益	（ 650,012 ）	（ 7 ）	（ 650,005 ）
受取利息	12	7	5
雑収入	650,000	0	650,000
経常収益計	6,440,188	6,793,633	△ 353,445
（2） 経常費用			
① 事業費	（ 2,163,287 ）	（ 3,120,720 ）	（ △ 957,433 ）
名作の舞台裏	262,083	290,490	△ 28,407
放送人の証言	549,401	604,020	△ 54,619
証言出版プロジェクト	5,334	0	5,334
放送人グランプリ	1,110,285	825,338	284,947
ラジオプロジェクト	22,155	20,000	2,155
NHK経営問題検討会	76,029	1,380,872	△ 1,304,843
イベント費用	138,000	0	138,000
② 管理費	（ 4,265,328 ）	（ 4,371,295 ）	（ △ 105,967 ）
給料手当	1,281,210	1,249,260	31,950
諸謝金	30,000	46,000	△ 16,000
事務所賃借料	879,084	879,084	0
通信費	337,041	393,740	△ 56,699
旅費交通費	461,058	391,221	69,837
会議費	173,980	232,100	△ 58,120
印刷費	167,299	294,338	△ 127,039
広告宣伝費	322,910	306,412	16,498
消耗品費	145,240	82,267	62,973
交際費	7,154	20,810	△ 13,656
支払手数料	32,579	38,930	△ 6,351
支払報酬	427,773	427,773	0
雑費	0	9,360	△ 9,360
経常費用計	6,428,615	7,492,015	△ 1,063,400
当期経常増減額	11,573	△ 698,382	709,955
当期一般正味財産増減額	11,573	△ 698,382	709,955
一般正味財産期首残高	1,381,766	2,080,148	△ 698,382
一般正味財産期末残高	1,393,339	1,381,766	11,573
Ⅱ 指定正味財産増減の部			
受取利息	175	204	△ 29
一般正味財産への振替額	△ 2,008,176	△ 3,049,626	1,041,450
当期指定正味財産増減額	△ 2,008,001	△ 3,049,422	1,041,421
指定正味財産期首残高	21,580,209	24,629,631	△ 3,049,422
指定正味財産期末残高	19,572,208	21,580,209	△ 2,008,001
Ⅲ 正味財産期末残高	20,965,547	22,961,975	△ 1,996,428

1,『名作の舞台裏』(放送番組センターと共催)
第52回「風神の門」(ＮＨＫ) の実施
(2022年11月5日)
2,『人気番組メモリー』・未実施
3,『放送人の世界～人と作品～』+『ドキュメンタリーワールド』・未実施
4,『放送人グランプリ』
第21回放送人グランプリ各賞
および第8回大山勝美賞の贈賞
5,『放送人の証言・収録』
遠藤隆、佐藤孝吉、河野尚行、山口秀矢の
各氏（計4名）
6,『放送人の証言 デジタルアーカイブプロジェクト』
ｉＵ(情報経営イノベーション専門大学)
との共同事業により
① 「デジタルアーカイブプロジェクト」発足を記者発表（2022年10月28日）
② YouTube での一般公開の開始を記者発表（2023年2月9日）
③ 30人のインタビュー映像を YouTube にリリース（2023年2月13日）
7,『ラジオプロジェクト』
「ラジオ聞き酒の会」の開催。
(2023年1月16日、2月9日)
『放送人グランプリ２０２２』候補のラジオ番組を募集、投票。
8,『情報交換交流』
今期はコロナ感染のため未実施
9,『放送人句会』
第83回(2022年4月12日)、第84回(6月14日)、第85回(9月10日)、第86回(10月11日)、第87回(12月13日)、第88回(2023年2月14日)の計6回開催。

【広報】
1, 『会報の発行』
①95号（2022年6月3日）放送人グランプリ2022贈賞式（5月21日）の報告、第51回名作の舞台裏（3月21日）、堀川とんこうさんを偲ぶ会（5月24日）
②95号別冊（2022年6月3日）特集～シンポジウムの報告～「ＮＨＫは何処へ行く 経営計画を読んで放送の近未来を考える（3月17日）
③96号（2022年9月30日）「消夏座談会」（9月10日）、伊藤視郎さんを偲んで
④97号（2023年2月10日）年頭所感、放送人グランプリ懇親会（2022年12月10日）、下馬評座談会（1月25日）
⑤97号別冊（2023年3月8日）第52回名作の舞台裏『風神の門』報告
2,『ホームページ』・適宜の更新。
3,『フェイスブック』・有効活用の検討

【ＮＨＫ問題検討会】
「ＮＨＫ経営計画（2021-2023年度）の修正案に対する『意見募集』に応じ、ＮＨＫに放送人の会として意見を提出。(2022年11月9日)

【総務】
1, 『会議の開催』・総会・理事会ほか各種会議の設定および運営
2, 『経理業務』・予算・決算他、日常の会計業務
3, 『会議資料作成・管理』・各種会議の資料及び管理業務
4, 『賛助金申請』・放送文化基金など
5, 【各プロジェクト対応】・「放送人グランプリ」、「名作の舞台裏」「会報発行」ほか
6, 『総務一般』・事務局の運営含む日常的な事務業務

(決議事項)
第1号議案
第10期（2022年度）決算案承認の件
総務委員長より、第10期決算報告書（2023年3月31日現在）の貸借対照表、正味財産増減計算書並びに個別注記表、財産目録について詳細に説明がなされた。
議長がその賛否を議場に諮ったところ、本議案は満場一致をもって原案どおり承認可決された。
第2号議案
理事・監事承認の件
理事・監事について、留任・新任の理事候補、留任の幹事候補が示され、本議案は満場一致をもって承認可決された。
なお、原案で示された1名の新任理事候補(須磨章)が、健康上の理由から理事就任を辞退したことも報告された。

【留任理事（31名）】
青木裕子、石橋映里、石橋冠、小川和之、加賀美幸子、柏木登、金平茂紀、木原毅、工藤英博、小池勝次郎、近藤邦勝、今野勉、新山賢治、菅野高至、鈴木典之、鈴木嘉一、曽根英二、田中秋夫、中崎清栄、永田俊和、西村与志木、林健嗣、深尾隆一、逸見京子、前川英樹、三原治、村上雅通、八木康夫、矢島良彰、吉田賢策、渡辺紘史

【新任理事（2名）】
石田研一、岡室美奈子

【留任監事（2名）】
河野尚行、長井典光

(その他の議案)
・総務委員長より、２０２３年度（第11期）の事業計画と運営体制案、及び理事会の日程案が示され全員了承した。
・会費滞納の退会について
定款「第7条」には、会費支払い義務を2年間履行しなかった場合は、会員資格を喪失することとある。住所不明で連絡の取れない長期滞納の会員については退会の手続きを執ることが了承された。

【総会後の2023年度第2回理事会・報告】
(決議事項)
1, 23年度（第11期）会長選定について
満場一致をもって今野勉が会長に推挙され、本人も了承した。
2, 23年度（第11期）役付き理事選定について
満場一致をもって前川英樹、渡辺紘史の両名が副会長に推挙され、本人も了承した。
3, 23年度（第11期）会長が欠けたる場合の代行理事選定について
副会長たる前川英樹、渡辺紘史の順で、代行を務めることが満場一致で了承された。
4, 23年度（第11期）の事業運営体制について（資料1）
23年度の事業運営体制案が示され、了承された。
（資料1）22年度事業担当に準じるが、7月理事会までに、さらに若返りを検討。
（敬称略・あいうえお順、傍線はプロジェクトリーダー。※印は非会員）
・『名作の舞台裏』『人気番組メモリー』
渡辺紘史、石橋映里、柏木登、逸見京子、八木康夫、
・『放送人の世界』
今野勉、菅野高至、前川英樹、
・『ドキュメンタリーワールド』
小池勝次郎、鈴木典之、矢島良彰、
・『放送人グランプリ』
渡辺紘史、石橋映里、小川和之、新山賢治、菅野高至、※桧山珠美、深尾隆一、三原治、八木康夫、矢島良彰、山登義明、吉田賢策
・『大山勝美賞』
八木康夫、※五十風文郎、石橋冠、鈴木嘉一、

鶴橋康夫、渡辺紘史

・『放送人の証言・収録』

工藤英博、石橋映里、芋原一善、小川和之、柏木登、加藤滋紀、北村充史、隈部紀生、近藤邦勝、戸田桂太、矢島良彰、吉田賢策、

・『放送人の証言・出版』

今野勉、深尾隆一、前川英樹、

コアメンバー（岡田裕克、木原毅、松田幸雄）、小川和之、

・『ラジオプロジェクト』

田中秋夫、木原毅、千葉邦彦、永田俊和、松尾羊一、三原治、

・『情報交換交流』

石橋冠、木原毅、曾根英二、長井展光、中崎清栄、村上雅通、吉田賢策、渡辺紘史、

・『放送人句会』

深尾隆一、

・『会報・広報活動』

菅野高至、青木裕子、鈴木典之、田中典子、逸見京子、松尾羊一、

・『NHK問題検討会』

前川英樹、小川和之、木原毅、河野尚行、今野勉、新山賢治、菅野高至、鈴木嘉一、田中秋夫、長井展光、永田俊和、三原治、矢島良彰、渡辺紘史、

以上、この総会・理事会の記事は正規の体裁の文書ではない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

報告「放送人の証言」収録プロジェクト

収録プロジェクト チーフ 工藤英博

二〇二三年度は、報道とドキュメンタリー関連の放送人の証言です。4人の価値ある証言から抜粋して、収録順に掲載します。

遠藤 隆さん

遠藤さんは1981年テレビ岩手入社。特にマスコミ志望ではなかったが、社会への幅広い関心から入社後は、報道一筋に40年。「NNNドキュメント」を実に29本手がけ、96年の「列島検証 破壊される海」ではギャラクシー大賞を受賞。北上山地の酪農大家族を24年間追い続けた「貧乏に幸あれ～ガンコ親父と7人の子どもたち～」などは数々の賞を受賞し、19年映画「山懐に抱かれて」として公開された。また東日本大震災から10年、遠藤さんが報道部長時代に企画制作した「たゆたえども沈まず」のテレビ版は、21年度芸術祭賞テレビ・ドキュメンタリー部門大賞に輝いた。長年に渡って民放ジャーナリズムの真髄を体現し続ける努力が称えられ、22年度放送人グランプリ特別賞を受賞した。

日本テレビ系の「NNNドキュメント」（以下、「Nドキュ」）シリーズは、放送開始から50年を迎えた20年、日本記者クラブ賞の特別賞を受賞した。恒例の受賞記念講演会で、遠藤さんが「Nドキュ」を代表して講演をした。キー局の日本テレビの担当者が話すのが普通かもしれないが、テレビ岩手の遠藤さんが登壇したように、キー局と系列局が対等の立場なのが「Nドキュ」の特長になっている。

『Nドキュ』の各局持ち回りの企画会議は、今でこそ大人しく進行していますが、昔は熱が入ってケンカ腰の議論になったものです。私たちは勝ち残っていくための〝テレビの甲子園〟と言っていました。勿論、最終結論は日本テレビが下すわけですが、系列局が持ち込んだネタをなんとかモノにしたい、というキー局の皆さんの思いが受け継がれてきたもので、お互いの一体感が深まってきているのだと思います。」

（担当：工藤英博、吉田賢策）

佐藤孝吉（たかよし）さん

佐藤さんは民放の放送が開始されて5年目、一九五九年に日本テレビ入社。日本初の刑事ドラマといわれる「ダイヤル110番」や「われら弁護士」などの演出を手がける。その後、バラエティ班に異動、娯楽ドキュメンタリーの分野で才能を開花させ活躍された。

最大のヒット作は「アメリカ横断ウルトラクイズ」。単なるクイズ番組の枠を超えて、人間ドキュメンタリー番組へ発展させた。「ピラミッド再現計画」、「カルガモさんのお通りだ」、「航空母艦エンタープライズ」、「追跡」など多くのヒット番組を手がけた。国際エミー賞、テレビ大賞、ギャラクシー賞、橋田賞など受賞多数。放送中の「はじめてのおつかい」は、子どもたちの素顔をあますところなく捉えて好評だ。

それらの功績が認められ、ディレクターからそのまま役員になることはあり得ないとされていたテレビ局で、専務取締役に昇格するという異例の出世を果たした二足の草鞋は、テレビ業界の名物になった。

87年のマイケル・ジャクソンの日本公演の独占放送権を日本テレビが獲得した。日テレは、コンサート放送の3日前に宣伝を兼ねて、マイケルに密着したドキュメンタリー番組を60分枠で放送することにした。そこで66年ザ・ビートルズが来日した時、あの伝説のオープニング・フィルムを撮った実績を買われて、ディレクターは佐藤さんに。「カナラがこんなに近くにいました……」のナレーションから始まった。

「ディレクターは被写体に近づき過ぎてはならない。時としてディレクターは邪魔者になる。良いカメラマンは透明人間になる術を知っているが、ディレクターは知らない。カメラだって近づき過ぎたらピントが合わない。被写体に近づき過ぎたディレクターは、ギリシャ神話のメデューサに魅入られたように固められて石にされる、と僕は思っている。相手がスーパースターや美人女優なら尚更だ。近頃、距離を見誤った番組が氾濫していて見苦しい。被写体にはとことん惚れぬき、且つ、客観性を保持することはもの作りの基本だと思っている。」

（担当：柏木登、矢島良彰）

河野尚行さん

河野さんは1962年NHK入社。初任地は札幌放送局のテレビニュース班だった。冷害や炭鉱事故の取材経験を経て、66年北見放送局へ転勤。少人数の地域放送局で、すぐに最年長のディレクターとなり、弱冠28歳にしてデスク業務も行う。北見局では各地の通信部の記者や車両のドライバー、地域の協力者など、放送を陰で支える人々の存在を目の当たりにして、放送と地域との結びつきを強く意識するようになった。この北見局での経験がその後の河野さんのキャリアに大きな影響をもたらしたといえる。河野さん自身も「札幌、北見での北海道勤務8年間が自分の仕事の原点だ」と語っている。

70年東京の報道局社会番組部に転勤。「新日本紀行」などの番組も担当したが、札幌オリンピック、あさま山荘事件などの中継業務や災害緊急報道を中心に活躍し、77年高松放送局のデスクに転勤。社会番組部CPに戻り、NHK特集「世界の中の日本」など大きなチーム編成で企画・取材する大型番組制作という中枢の仕事に取り組んだ。この頃、NHKが総力を挙げた企画に河野さんが関わった事例は多い。88年大阪編成局編成部長。1年で東京に戻って編成主幹となる。93年に理事・副総局長（報道・国際担当）に就任した。

理事として要職を歴任した後、97年に専務理事・放送総局長に就任。99年に引退後は、NHKサービスセンター理事長を03年まで勤めた。

退職後はいくつもの番組審査委員、選奨委員を務めたが、中でも地方の映像祭審査委員長とケーブルTVアワード審査委員は現在も続けておられる。NHKの大型番組制作の中枢で仕事をされたばかりか、その領域への高い見識を持たれている河野さんの視線が地域放送局やケーブルテレビ局の制作番組に注がれ続けているのは、放送界全体にとって心強いことである。

「思い返せば、初任地の札幌放送局ではNHKの仕事に携わっている様々な人たちが、まとまって仕事をしているチームワークの大切さ、みんなで楽しく仕事をするためにはどうすればよいか、を仕込まれました。日本列島の最北の北見放送局では、どのような放送をすれば地域に人たちに喜んでもらえるか、を学びました。また、北見には屯田兵の開拓の歴史や独特のオホーツクの文化があり、人文地理に関心がある自分としては興味深かった。二十代のすべてを過ごした札幌の3年半、北見の4年半は、得がたい経験を積むことができました。」

（担当：戸田桂太　工藤英博）

山口秀矢さん

山口さんは中学1年の時、ビートルズの武道館公演の放送を観て衝撃を受ける。大学時代の4年間で、実に一二〇〇本の映画を観る。映画監督を目指して上京したものの映画界は斜陽のど真ん中。映画雑誌で〝スタッフ募集〟の記事を見て応募したのが、ATG映画の黒木和雄監督「竜馬暗殺」。見習い制作助手として過酷な現場を経験する。

テレビ制作の初体験は、映画監督が競作したTBSの「ドキュメンタリードラマ・歴史はここに始まる」で、黒木監督の制作回のチーフ助監督を2年間勤めたこと。

その後、「第1回ATGシナリオコンクール」で奨励賞受賞。映画化に乗り出すが、ATGが活動休止。失意の中で、次第にテレビの仕事をするようになる。

82年、制作会社「ドキュメンタリージャパン」が設立され、代表の河村治彦氏に誘われ、草創期のメンバー・ディレクターになる。当時の民放各局ではドキュメンタリーや情報番組が競い合い、「テレビシティ」「ネイチャリングSP」など、各局のゴールデン帯の番組を数多く演出した。テレビ業界は予算も潤沢な時代だった。

90年自らの企画を実現する目的で、少数精鋭の制作集団「えふぶんの壱」を設立。以後30年間、代表取締役・プロデューサーを務める。

主な受賞作は、90年「津軽海峡にサメを追え！」（日本テレビ）民放連賞優秀賞、99年「大新宿ノラ猫物語」（日本テレビ）総務大臣賞・ATPグランプリ、06年「関口知宏の列島横断鉄道の旅」（NHK）ギャラクシー賞など。

「忘れられないのは、中学1年の時にテレビで観た公演前のビートルズのオープニング映像。ビートルズが羽田に降りて、車で赤坂のヒルトンホテルへ入るまでのショートフィルムなのですが、今、見直してもすごいカッティングだし、静寂からミスター・ムーンライトが流れる高度な編集と撮影技術。夜明けの首都高速からの東京が美しくて……。東京へのあこがれも手伝って強烈な映像体験でした。

もうひとつは、高校の修学旅行先の京都の映画館で、ミケランジェロ・アントニーオニ監督「欲望」を観て受けた衝撃。「存在」をテーマにした難解な映画でしたが、とても深い感銘を受けました。帰りの夜行列車に揺られながら、ビートルズと「欲望」とが私の中でダブルスパークして、将来東京で映像制作の仕事をしたいと心に決めました。」

（担当：矢島良彰、柏木登）

****

第88回放送人句会

令和五年二月十四日（火）◇於　赤坂・麦屋

出席　中村フミ　林備後　佐々木光野
　　近藤久仁　深尾一化　松田幸雄

兼題　春浅し　若布　鶯
　（業界用語）化粧前

化粧前一人ひとつの桜餅　幸雄
海ひとつ若布で埋め若布刈る　備後
春浅し露天昼風呂月白し　久仁
確執を消す化粧前梅薫る　フミ
浅き春トワイライトの立ち飲み屋　フミ
春浅し明けゆく空の固さかな　一化
春浅し午後の紅茶の差し向かひ　一化
春浅し未だ真っ新のランドセル　幸雄
愚痴嫌味嫉妬凍てつく化粧前　一化
鶯のときに緩みて川渡る　備後
鶯や去年出逢ひしはこの辺り　一化
孫十二受験に落ちし春浅き　久仁
鶯声に夜具を跳ねても二度寝かな　久仁
切り通し抜けて鶯聲飛び来る　久仁
化粧前花であふれし春特番　久仁
春眠しセリフ積めこむ化粧前　幸雄
三陸の若布おおきく膨れけり　幸雄
下り尾根丸い背で聞く初音かな　幸雄
春浅き島の童の赤き頬　光野
もう一枚鶯ではなくあかよろし　幸雄
春塵やスター判らぬ化粧前　光野
老いたるか初音に知らず涙して　一化
老鶯の聲にまさかの覚えあり　備後
バラ一輪活けてありたり化粧前　備後
化粧前叶へたき夢春浅し　フミ
湯通しにさらり青へと若布かな　光野
鶯や坂の途中の角打ち屋　フミ
春浅しまだ生きろよと母の星　フミ
鶯の突鳴く寺や源氏山　光野
三陸の若布に元気もらふ朝　フミ
朋来る若布の煮付けコップ酒　久仁

第89回放送人句会

令和五年四月十一日（火）◇於　赤坂・麦屋

出席　中村フミ　林備後　佐々木光野
　　近藤久仁　深尾一化　松田幸雄
　　山登登羊亭（以上七名）

兼題　栄螺　春日傘　山桜
　（業界用語）ランスルー

春日傘それぞれの道三姉妹　フミ
春扇はらりと鳴りてランスルー　久仁
乳母車片手でなほす春日傘　登羊亭
栄螺の腸くるんと回しひとり酒　フミ
蕊残し花に一期のランスルー　登羊亭
千穐楽力士往きあふ春日傘　久仁
姉の背の小さくなりたり春日傘　フミ
満ち足るもひよどり恋し山桜　登羊亭
炊(かし)き時湯治場の灯り山桜　久仁
消え物に菜の花まじるランスルー　久仁
謹直に生きて栄螺の二十年　備後
ランスルー三度重ねて星朧　幸雄
ランスルー止めるほどよ春疾風　光野
傾く陽姫さざえ煮るごろた浜　久仁
ランスルーあれば悩まぬ恋の道　フミ

磯サザエ角(つの)に見えたる脚太し　幸雄
岩踏まえ潮に逆らふ栄螺かな　一化
春日傘東に向けて佃まで　備後
痣ひとつ赤子にかざす春日傘　登芋亭
裾模様合はせ鏡の春日傘　一化
まず栄螺乗せて栓抜くバーベキュー　一化
春日傘たたみて仰ぐ三分咲き　幸雄
月遅れなれど故郷の山桜　一化
思ひ人認めさしたる春日傘　一化
濃緑の苦さ身に染む焼き栄螺　幸雄
谷底へ尿(しと)を放たば山桜　久仁
売り出しは白にはじまる春日傘　備後
眺むれば緑きみどり山桜　幸雄
遠山にぼんぼりのごと山桜　フミ

次回・第91回
2023年8月22日（火）麦屋
兼題　夜学、鯊　鰯雲
（業界用語）消え物

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

訃報

三名の会員がお亡くなりになりました。ご冥福をお祈り申し上げます

薮野　慶人（おぎの　けいじん）
二〇二三年2月4日　享年90。
昭和8年生まれ、東宝撮影所の助監督を経て、一九五八年開局と同時に読売テレビ入社、ドラマ担当に（当時はすべてナマ）。主な作品：「大阪野郎」、「けったいな奴」、「赤ちゃん誕生」ほか。

新村　もとを（にいむら）
二〇二三年1月25日　享年83。
昭和15年生まれ、東京放送を経て、テレビマンユニオンに入社。ドキュメンタリーのプロデュース、音楽番組のディレクター。担当作品：「遠くへ行きたい」、「オーケストラがやってきた」、ＩＢＭスペシャル「印象派」、「ＴＶムック」、「追跡」ほか。

高島秀之（たかしま　ひでゆき）
二〇二三年　享年86。
昭和12年生まれ。一九六一年ＮＨＫ入局。ディレクター、プロデューサー、放送部長、編成部長、放送局長、ＥＤを経て退職。主な作品：中学生日記、ＮＨＫスペシャル、市民大学講座など。96年茨城大学教授。99年文教大学情報学部、05年同大学院情報学専攻教授（兼任）。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

退会者

相本芳彦（北日本放送、フリーアナ。95歳）
並木　章（ＴＢＳ、ＴＢＳビジョン。89歳）
池田正之（ＮＨＫ、札幌大学文化学部教授。）
遠藤雅充（中京テレビ、ＢＳ日テレ。）
中町綾子（日本大学芸術学部放送学科教授）
西憲彦（日本テレビ、日テレアックスオン。）
（連絡先不明）江口展之、永野敏一、川口健一

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

編集後記

▼受賞者のみなさま、お忙しいにも関わらず、贈賞式のスピーチ原稿を校正していただきました。おかげさまで〝放送の豊かさ〟が溢れる『グランプリ特集号』となりました。あらためて、この場をかりて御礼を申し上げます。ありがとうございました。▼新年度より、大浦勝さんと若泉久朗さんが入会されました。ご紹介は次号といたします。お許し下さい。▼特集号が割り込まなければ、次号99号の発行は9月29日（金）の予定です。23年度上半期総括の『消夏座談会』と、会員短信を掲載します。でもって、次の次は100号になります！▼「コロナ第9波の入口で、今年も8月にピークを迎える」との予測があります。みなさま、くれぐれも、ご自愛下さいませ。（たかゆき）

会員名簿

2023.06.16 現在

【あ】藍澤幸久　相田洋　青木裕子　青山悌三　秋田和典　雨宮望　新井和子【い】石井彰　石井ふく子　石田研一　石橋映里　石橋冠　石原信和　磯智明　板谷駿一　市岡康子　市川哲夫　市村元　伊藤博文　井上佳子　今井義典　芋原一善　岩澤敏　岩瀬弥永子　【う】上村忠　浮田周男　臼杵敬子　【え】江川雄一　遠藤利男　【お】大池雅光　大浦勝　大川光行　大沢悠里　太田昌宏　大類なぎさ　緒方陽一　岡田裕克　岡野真紀子　岡室美奈子　岡本勉　小川治　小川和之　小河原正巳　尾田晶子　織田晃之祐　【か】加賀美幸子　柏木登　片岡敬司　加藤滋紀　加藤拓　加藤義人　金平茂紀　川平朝清　鎌内啓子　亀谷弘美　軽部淳　川喜田尚　川渕恵子 河邑厚徳　【き】北川信　北出晃　北村美憲　北村充史　木下浩一　木原毅　木村成忠　【く】工藤英博　隈部紀生　訓覇圭　黒崎博　黒沢淳　【こ】小池勝次郎　河野尚行　小玉滋彦　後藤和晃　小山帥人　近藤邦勝　今野勉　【さ】斎藤秀夫　斎明寺以玖子　寒河江正　坂元良江　桜井元　佐々木彰　佐々木光政　佐藤敦　佐藤幹夫　佐藤理恵子　佐野有利　【し】塩田純　重延浩　重村一　重盛政史　静永純一　柴田陽一郎　清水誠　志村一隆　下崎寛　下重暁子　下村幸子　白井博　新山賢治【す】菅野高至　菅野嘉則　杉田成道　鈴木俊樹　鈴木典之　鈴木弘貴　鈴木芳夫　鈴木嘉一　須磨章　【せ】清野豊　関佳史　せんぼんよしこ　【そ】曽根英二　【た】高田宏　竹中一夫　田澤正稔　多田健　田中秋夫　田中直人　田中典子　田中則広　【ち】千葉邦彦　【つ】塚原あゆ子　塚本茂　塚本幹夫　辻本昌平　土屋敏男　つボイノリオ　露木茂　鶴橋康夫　【と】東城祐司　戸田桂太　富沢一誠　豊原隆太郎　鳥谷規　【な】長井展光　中込卓也　中崎清栄　中島僚　中島由貴　永田浩三　永田俊和　中村敦夫　中村克史　中村季恵　中村芙美子　中山和記　【に】西村与志木　仁藤雅夫　二宮文彦　【ぬ】沼田通嗣　【の】延江浩　信井文夫　【は】萩原豊　林健嗣　林安二　原田令嗣　【ひ】日笠昭彦　玄武岩　【ふ】深尾隆一　藤井チズ子　藤井正博　藤久ミネ　藤村忠寿　古川重樹　【へ】逸見京子　【ま】前川英樹　牧之瀬恵子　増山麗央　松尾羊一　松田幸雄　黛りんたろう　丸山友美　【み】三上義智　光原朋秀　三原治　三村景一　三村千鶴　宮川鑛一　宮崎洋　【む】村上光一　村上雅通　村上佑二　村田亨　【も】本木敦子　元田成　諸橋毅一　【や】八木康夫　矢島良彰　薮内広之　山鹿達也　山崎隆保　山崎裕　山路家子　山田尚　山田良明　山登義明　山根基世　【よ】吉澤保　吉田賢策　吉村豪介　吉村直樹　【わ】若泉久朗　和崎信哉　渡辺浩平　渡辺紘史（会員 208 名）

【賛助会員】日本民間放送連盟　TBSメディア総合研究所　融合研究所　日本ケーブルテレビ連盟